



西九州大学子ども学部 定年退職雑感及び思い出の記

松尾正幸

私は、昭和39年4月に大学に入学し、以来大学で学びそして生活し、平成25年3月末日をもって西九州大学子ども学部を定年退職の予定である。数えれば実に49年の長きにわたる。約半世紀にも及ぶ大学という高等教育機関における教育と研究の中で、私を感じた私見と私の脳裏に浮かぶ思い出を書き記してみたい。

I 大学の学部時代の雑感及び思い出

私は、昭和39年4月広島大学教育学部高等学校教育科社会科（歴史専攻）に入学し大学生生活を開始した。当時の高校進学率は50%であり、短大を含めた高等教育機関進学率は、12.5%であった。同世代の15%以内の人間が入学を許可される高等教育機関は、まだエリートのための教育機関であるというのが、教育社会学の知見であるが、当時は大学の中でも国立大学、中でも国立I期校が人気であった。学部では当時の社会を反映して工学部が人気があったと思う。工学部の中でも船舶工学科や造船学科がわが世の春を謳歌していたと思う。経済成長の時代、好景気の時代で、学生の就職は文学部と教育学部以外はほぼ100%という時代であった。経済学部や法学部の学生で学生運動をしていた親友も、平気な顔をして一流の銀行や商社に就職していた（出来た）良き時代であった。

教育界への就職状況はどうだったであろうか。教育界への就職は、景気には左右されない。基本的には、退職者数、生徒数、クラス定員によるのである。私は中学校の社会科の先生か高校の社会科の先生を希望していた。できれば故郷の福岡県を希望していた。そしてまた一方では、大学院に進み研究者の道もいいなあと思ひそかに思っていたが、親には言いだせなかった。弟も大学進学を控えていたし、1日も早く自立しなければと思っていたからである。親と話し合っ、福岡県の高校社会科教諭の試験（50倍）、愛知県の中学校社会科教諭の試験（10倍）、愛知県の高校社会科教諭の試験（15倍）、それに大学院への進学の準備もしていた。結果として愛知県と広島大学大学院に合格した。福岡県の高校社会科教諭の試験（50倍）に合格するためには、大学院の2年間の勉強が必要との私の意見に乗せられて（?）、あっさりと大学院進学を許してもらった。もちろんバイト、奨学金、授業料全額免除で、家からの送金を大幅に抑えるように努めた。

II 大学院時代の雑感及び思い出

大学院は、昭和43年4月から昭和47年3月まで過ごした。この時代は、いわゆる大学紛争の時代であった。良かれ悪しかれ、すべての学部学生と大学院生は、政治と学生運動の渦に巻き込まれた。学問研究と社会との関係、学問と政治との関係、大学人と社会との関係等について徹底的に考えさせられた。親や大学外の人には言いたくない色々な場面に出くわしたり、人間や社会や人生について学ぶ機会も多かった。大学の研究室では教えてもらえない貴重な体験もしたが、しかし一方では、失ったものも多々あったと思っている。大学院生活は、厳しい指導もあつたりして大変であったが、また楽しい希望にあふれるそれであった。当時は、大学拡張期、大学膨張期の開始期であったと思

う。好景気、高度成長期、大学進学率の向上を受けて、全国的に短大や大学が多数設置された。既存の大学も増設、増学科され、学生定員も増えた。それ故、大学教員の需要も大きく伸びたのは言うまでもない。大学教員の最大の供給源は、大学院の修士課程、博士課程であり、多くの求人が大学院に殺到した。今と比べれば、はるかに就職しやすい時代であったと思われる。おかげで、私も博士課程の3年間を過ごすことなく、博士課程2年後に国立大学である島根大学に研究者としてのポストを得ることができた。

Ⅲ 島根大学教育学部時代の雑感及び思い出

島根大学教育学部社会科教育研究室の助手として2年間過ごした後、講師に昇格し、本格的に大学の教員としての研究と教育に従事した。山陰地方は雪が多く、寒く、曇りの日が多く、九州生まれの私にとっては楽しい思い出はあまり多くない。近くにはスキー場もあったが、九州生まれの私にとっては全然興味がわかないし、第一スキーは怖い遊びであった。山陰地方の海岸は、海釣りの絶好の場である。しかし、九州生まれの私にとっては、海釣りよりも川や堀、ため池でのミミズを餌にした淡水での魚釣りこそ馴染みがある。海釣りにはどうしても興味がわかなかった。島根大学教育学部に赴任して3年間が過ぎた頃、佐賀大学教育学部から社会科教員の全国公募があった。5年間勤めたらその後はどこの大学に転勤してもOKという雰囲気があったので、まだ3年にしかない自分は、運がなかったんだとあきらめていたら、学科代表の先生から呼び出され、「35年に一度のチャンスであるから、応募したければしてみなさい。そして駄目だったら、この大学に身をうずめなさい」と助言された。3年間の短い期間であったが、学生との思い出は今も強烈に残っており、今でも手紙のやり取りがあるほどである。

Ⅳ 佐賀大学時代の雑感及び思い出

佐賀大学には、昭和50年4月から平成22年3月までの定年退職時まで約35年間勤めた。主に小学校社会科教員の養成、中学校や高校の社会科・地歴科・公民科教員の養成に従事してきた。佐賀大学時代の最大の思い出は、昭和54年4月10日の教育学部教授会での禁煙決議である。このころは大学医学部でももうもうたるタバコの煙の中で教授会をやっていた時代であり、当時としては大ニュースであり共同通信社や各新聞社が大きく報道し、NHKの全国版ニュースとして全国にテレビ放映されたのであった。これが切っ掛けとなり、教授会禁煙決議の動きは、全国の大学に広がり、おそらく現在これを実行していない大学は皆無ではなからうか。

Ⅴ 西九州大学子ども学部時代の雑感及び思い出

3年間の子ども学部時代の思い出の中で最大のもは、やはりなんといっても西九州大学付属三光幼稚園の園長経験であろう。佐賀大学時代に付属小学校校長、付属中学校校長の経験はあるが、やはりまた前者とは違った思い出がある。3年間の幼稚園園長の経験の中で、つくづく人間の幼児の成長・発達の素晴らしさを実感させられたことである。三光幼稚園児の賢さ、知的発育の高さを知らされたことである。特に幼稚園年長児の知的成長に驚かされた。幼稚園年長児は、小学校に進めば、かわいい、かわいい1年生、何にもできない1年生として、まるで赤ちゃんみたいに上級生からお世話されている。園長を経験するまでは、このような小学校側の対応に別段の不満はなかったが、いまはそうではない。「あの賢く成長した幼稚園年長児を赤ちゃん扱いするな」と抗議したくなる現在の自分である。